

【目的】家庭においては衣類の清潔を保持し長持ちさせるため、通常の洗たくの他にしみ抜きが行われている。本研究では、家庭で出来るしみ抜き方法を再検討し、有効なしみの除去法を明らかにすることを目的として、先ず、各種しみの全般的な特性把握を試みた。

【方法】試験布：綿、毛、ポリエステル製の平織白布。しみ汚染布：飲食物、調味料、筆記用具、泥など約30種のしみを選び、浸漬、滴下、塗布などの方法で汚染。処理：汚染直後、乾燥後、20日後、120日後。処理条件：①水洗い②普通洗たく③つけ置き洗たく（酵素配合洗剤浸漬後普通洗たく）④洗剤もみ洗い（中性、原液）⑤ベンジンもみ洗い⑥エタノールもみ洗い⑦漂白（塩素系）⑧漂白（還元型）。（①②③の洗たくはかき混ぜ式洗浄力試験機を使用） 評価：処理前後の反射率より除去率を算出し、多変量解析などにより検討。

【結果】①汚染後、経時によりしみの濃さや色相に変化の生じるものがあり、しょうゆ、ソースなどは濃くなった。②各種しみを、処理に対する除去特性で分類した結果、いくつかのグループに分けられた。これには汚れの性質（水溶性、水不溶性など）との関連がみられた。③しょうゆなどの水溶性のしみは、洗剤や漂白剤の効果が高く、溶剤は効果が低い。ミートソースのような水と油の混合系では、溶剤でもある程度効果がみられた。口紅などの油溶性のしみは、洗剤と溶剤の効果が高い。また、油性マーカなど、洗剤、漂白剤とも除去率が低いしみもみられた。④水溶性及び水・油混合系のしみの除去率を、繊維別にみると、洗剤処理では綿よりも毛、ポリエステルの方が除去されやすく、溶剤処理では毛が除去されやすい傾向がみられた。